TIEPh
Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy
TOYO UNIVERSITY

Newsletter　No. 11　2011. 2

TIEPh 主催セミナー
「環境人間学ー環境問題への「人間学的」アプローチ―」開催

第２ユニット：今井　芳昭

10 月 23 日に一般社団法人サステイナビリティ・サイエンス・コンソーシアム（SSC）の後援を受け、東京農工大学の環境思想・教育研究会との共催で「環境人間学　ー環境問題への「人間学的」アプローチ―」と題する、TIEPh（第２ユニット：価値観・行動）のセミナーが行われた。

まず、東京農工大学教授の尾関周二氏が「近代文明を越えてエコロジー文明へ　―労働とコミュニケーションの思想的系譜にふれつつー」というタイトルで基調講演を行った。氏は、人類の歴史を、自然循環の中にいた人間としての前近代、人間が自然から離反した近代文明に区分し、労働とコミュニケーションの観点から興味深く紹介した。その上で、今後は、人間と自然との共生へ向けたエコロジー文明であると捉え、短・中期的には環境福祉社会の構築、長期的には＜農＞を基礎とした持続可能な共生型共同社会の構築の必要性を指摘した。

その後、TIEPh のリサーチ・アシスタントを務める東垣絵里香氏が、自身の研究も紹介しながら、2010 年度の日本社会心理学会大会（広島大学）で発表されていた環境問題に関する社会心理学研究を紹介した。続いて、第２ユニットの大島尚教授が「環境配慮の価値観と行動」というタイトルで、中国、シンガポール、ベトナム、日本を対象に行った環境問題に関する価値観の国際比較調査について報告した。環境問題の解決には、地域社会での実践が効果的であり、また、未来世代との関係が重要であるが、日本ではそうした認識が他の３国に比べ低い傾向が認められるということであった。そして、私（今井）が Ajzen(1991)の計画的行動理論に基づいて行った、環境配慮行動の規定因に関する質問紙調査の結果を報告した後、活発な質疑応答が行われた。

尾関周二　氏

本セミナーは、環境哲学と社会心理学とが相互の研究成果を知るための刺激的な場になったと言える。今後もこうしたセミナーを継続していくことが、環境問題を解決するに当たって、新しい発想を生み出す契機になると確信した。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

今回のニューズレターでは、2010 年度の活動報告、及び活動予定を掲載します。詳細につきましては、TIEPh ホームページ（http://tieph.toyo.ac.jp/home.html）をご参照ください。

TIEPh 共催研究会「第二回人間再生研究会」報告

第３ユニット：稲垣　諭

「第二回人間再生研究会」を終えて

昨年末に、TIEPh の第三ユニットが共催している人間再生研究会（第二回）が行われた。哲学教員およびセラピスト総勢 100 名ほどの参加者があった。TIEPh の第三ユニットでは哲学的な環境デザインの設定がプロジェクトの継続課題となっているが、環境そのものの内実を吟味し、拡張するには、健常者や障害者といった外的区分に限定されない多様な生の様式の発見を欠くことができない。生の様式とともに、その生がかかわる環境および現実それ自体が変化してしまうからである。健常者にとって住みやすい環境が、障害者にとって住みやすい環境であるとはとても言えないのは自明である。では逆に、障害者にとって住みやすく、かつ自分の障害との新たなかかわりに気づくことができるような環境は、健常者にとっても良い環境とは言えないのであろうか。昨今のユニバーサルデザインは、こうした課題設定を含みこんでいるのは確かであるが、その際問題になるのは、「ユニバーサル」の深さや厚みとでもいうべき、そこに隠された見えない経験の多層である。

こうした課題に迫るためには、実際のリハビリテーションの臨床場面における患者の多様な世界とのかかわりを考察するのがひとつの手がかりとなる。今回の研究会では、河本英夫研究員と稲垣諭研究員によってそれぞれ、リハビリテーションにおける神経現象学的な経験の解明の仕方、そしてその展開ポイントについて論じられた。その後の特別講演として、自然科学研究機構生理学研究所の鍋倉淳一先生に、シナプス形成およびその再編の特殊なモードに関する最新の脳科学的知見について講義していただいた。現状では、マウスの臨床実験段階にとどまるが、シナプスのネットワークそのものの監視、および除去を行う免疫細胞のミクログリアの特定化の報告は、神経系の再編の新たな可能性を拓くものである。最後にソレイユ川崎の人見眞理先生が、脳性まひの子どもの特殊な症例を取り上げることで、セラピストと患者がともにリハビリ治療を継続していく際の、患者の発話や緊張度、両親の対応、さらには患者の治療の進展度からは見えにくくなる、彼らの脳損傷の特殊なシステムの在り方が指摘された。

脳科学の展開は、神経細胞レベルから、免疫細胞が創り出す高分子レベルというように、圧倒的に詳細に細かくなっている。とはいえ、脳の再編の機構が明らかになったとしても、そこから障害とともに現実を生きる生体が、どのような経験をリハビリ等を通じて行えばよいのかが決まる訳ではない。そのため今後もミクロな科学的知見と、リハビリの臨床からしか見えない経験の進展との折り合いの付け所を繰り返し見極める作業が必須となる。

TIEPh 後援シンポジウム「宗教と環境―地球社会の共生を求めて」報告

第１ユニット：竹村　牧男

「自然観探究ユニット」の課題

平成２２年１１月６日午後、東洋大学共生思想研究センター、宗教・研究者エコイニシアティブ共催、TIEPh 後援により、「宗教と環境――地球社会の共生を求めて」シンポジウムが東洋大学白山校舎にて開催された。このシンポジウムは、宗教学研究者と宗教実践者が一堂に会して、宗教者が今日の地球社会の環境危機にどう対応していくかを、真剣に議論しようとした、新しい試みである。参加者は、２００名ほどに上った。

西山　茂（東洋大学社会学部教授）の開会あいさつのあと、基調講演１として、山本良一（東京大学名誉教授・環境経営学）による「低炭素革命の成否と人類の未来－宗教に期待するもの」、同２として、薗田　稔（京都大学名誉教授・環境宗教学）による「日本人の伝統的環境観－神・人・自然のつながり」の講演がなされた。

その後、シンポジウム「環境危機に対して宗教者は今、何をなすべきか？」が開かれ、まず、①原井慈鳳（法華宗菩薩行研究所所長）「エコを進める菩薩行とは何か」、②深田伊佐夫（立正佼成会中央学術研究所研究員）「自然への感謝の心をどう養うか」、③山岡睦治（生長の家出版・広報部長）「ISO14001 認証取得から炭素ゼロへ」、④桑折範彦（徳島大学名誉教授・日本聖公会員）「環境・温暖化とエネルギー」、⑤内藤歓風（シンプルライフ普及センター代表・日蓮宗朝善寺住職）「持続可能なシンプルライフのすすめ」、の発表がなされた。続いて、竹村牧男（東洋大学文学部教授）の司会のもとに、発表者を中心に、世代間倫理の根拠を問うなど、シンポジウムテーマに沿って活発な討論がなされた。

内容は共生思想研究センターの報告にゆずるが、会場はきわめて熱心な雰囲気に覆われ、次回の開催への熱い期待も多くよせられるほどであった。

講演会報告・レビュー

クリストフ・ムント氏特別講演を聴いて

武藤　伸司（東洋大学大学院文学研究科博士後期課程，TIEPh リサーチアシスタント）

2010 年 10 月 9 日、ハイデルベルク大学名誉教授、クリストフ・ムント氏を招聘し、特別講演会を開催した。氏の研究は、統合失調症の精神病理学を中心に、社会心理学や人格類型論、精神疾患の現象学的、神経心理学的諸概念の構築に至るまで、広範囲に渡っている。第 3 ユニットとの接点としては、環境デザインにおいて考慮が不可欠である身体性と環境の関係性に関して、氏のカール・ヤスパースの思想を基盤とした状況概念の考察がそれに当たる。氏の見解は、不安や疑念といった精神的危機的状況を指す限界状況の一般的な概念だけでなく、旅行先での疎外感、芸術における感動など、従来考えられてきた限界状況とは異なる状況を提示している。さらに加えて、精神病理学において限界状況が問題となるような抑鬱性患者は、その人格と状況の相互作用を考慮せねばならないのだが、その際の病理的構造と、その療法に関して、患者が置かれている「環境」が深い関わりを持つことが氏から示唆された。

TIEPh 第 3 ユニットの研究テーマは環境デザインであり、環境問題の改善と持続可能性について、人間個々人の周囲という意味での環境から地球環境に至るまで、その領域に限界を設けていない。特に、今回の講演内容は前者の領域に関係し、環境と人間の精神・身体に関する相関関係を研究する具体的な研究成果として貴重である。ムント氏の病因論の構造を敷衍すれば、人間と環境のポジティブなシステムが構築できるのではないか、という見解が、現象学的観点からの身体性の考察を研究プログラムとして持つ我々にとって、非常に有益であった。

今後の研究について、今回のような異分野からの示唆を十分に考慮し、このような交流を契機に、学際研究を更に推進すべきであることが確認され、そして様々な領野の研究を、具体的な環境デザインとして、具現化ないし提示することが目標とされた。

「日本の公害・環境問題－歴史的教訓と課題」講演を聴いて

東垣　絵里香（東洋大学大学院社会学研究科博士後期課程，TIEPh リサーチアシスタント）
千田　一輝（東洋大学大学院社会学研究科博士前期課程）

2010 年 11 月 13 日、東京農工大学にて、環境思想・教育研究会主催(TIEPh 共催)による、環境思想・教育研究会の第 15 回研究例会が開催された。その中で、宮本憲一氏(大阪市立大学名誉教授)による、「日本の公害・環境問題―歴史的教訓と課題－」と題した講演が行われた。講演の内容は、戦前から現代までの公害問題についての考察、人々が公害問題にどのように対処してきたか、公害がもたらした教訓などであった。

近年、社会心理学では、環境問題や環境配慮行動について、多くの研究がなされている。宮本氏の講演のテーマは、社会心理学の領域においても扱う問題を対象としており、共感できる点も多かった。特に興味深く思われたのは、弱者が公害・環境問題の被害を受けやすいことに触れた点である。経済学的視点から見て、市場に与える影響が小さい「生物的弱者」(年少者、高齢者)や、劣悪な環境に居住せざるをえない「社会的弱者」(低所得者)に対して、行政は公害対策を取らなかったと指摘した。その中で、公害の被害者であった住民たちが団結し、環境権を勝ち取ったケースが説明された。このケースがきっかけとなり、日本では、地域住民から行政へ、すなわち、ボトムアップ式で公害対策が広まったのである。併せて、市民の団結のために地域コミュニティが、いかに重要であったかの説明がなされた。今回説明されたケースに代表されるような、地域コミュニティやソーシャル・キャピタルの重要性については、社会心理学の中でも注目されており、環境問題を解決する糸口として期待されている。

宮本氏は、環境問題がもたらす、損失の大きさについても論じた。公害や環境破壊は、人間の健康被害や、再生産が不可能な自然破壊などの、後から回復できない絶対的・不可逆的損失が含まれていることを指摘した。事業や政策を立案する際は、これらの「起こり得る損失」を過小評価せずに、予防するよう努めることの重要さが強調された。環境をどのように評価するのかという問題は、環境に対する価値意識や、環境配慮行動に対する態度、効力感などとも関連すると思われる。

TIEPh では、主に哲学、社会心理学の観点から、サステナビリティについての示唆を提供してきたが、今回の講演のような「環境経済学」という、異分野の学問領域の知見も融合させることで、さらに新たな発見が得られるものと考えられる。

TIEPh 主催シンポジウムのご案内

東洋大学創立 125 周年記念　公開シンポジウム

『サステイナビリティの思想―哲学としてのエコロジー』

このシンポジウムは、東洋大学が提唱する「エコ・フィロソフィ」の確立にむけ、持続的な発展をめざす「サステイナビリティ・サイエンス」の基盤的な思想について考察するためのものである。今回のシンポジウムでは、サステイナビリティ学の意義と環境問題、環境政策の現状、あるいはそれに対する見解などをそれぞれの専門家に講演していただく。

日時：　2011 年 3 月 19 日（土）　13:00〜17:00

場所：　東洋大学白山キャンパス　井上円了ホール

基調講演：　武内和彦氏（国連大学副学長、東京大学 IR3S 副機構長）「サステイナビリティ学が拓く自然共生社会」

八木信行氏（東京大学特任准教授）「サステイナビリティをめぐる国際課題と日本の役割」

小池百合子氏（自由民主党総務会長、元環境大臣）「環境保全の心技体」

【お申込み方法】東洋大学ホームページ http://www.toyo.ac.jp/rc/tieph/の入力フォームから、

または、①氏名（フリガナ）②住所③電話番号④職業を明記の上 FAX(03-3945-7906)まで。

＊定員になり次第締め切り。定員超過で参加できない場合にのみご連絡をさしあげます。

＊お預かりした個人情報は、本事業以外の目的では使用いたしません。

なお、シンポジウムに関するお問い合わせ先は、mlecophilo@toyo.jp または FAX（03-3945-7906）まで。

＜2010 年度　TIEPh 活動報告＞

4 月〜7 月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

10 月 7 日〜8 日

TIEPh 共催

精神病理・精神療法学会　第 33 回大会

於：東洋大学　白山キャンパス

10 月 9 日

TIEPh 共催　講演会

「環境と精神－身体状況の哲学」

於：東洋大学　白山キャンパス

10 月 23 日

TIEPh 主催　公開セミナー

「環境人間学」

於：東洋大学　白山キャンパス　6 号館　6204 教室

11 月 6 日

TIEPh 後援　シンポジウム

「宗教と環境―地球社会の共生を求めて」

於：東洋大学　白山キャンパス

11 月 13 日

TIEPh 後援　講演会

「環境思想・教育研究会　第 15 回例会」

於：東京農工大学　府中キャンパス　第二講義棟

12 月 11 日

TIEPh 共催　研究会

「第 2 回人間再生研究会」

於：東洋大学　白山キャンパス　6 号館　6309 教室

＜TIEPh 今後の活動予定＞

3 月下旬

『「エコ・フィロソフィ」研究』vol.5 刊行予定

3 月 19 日

TIEPh 主催　公開シンポウム

『サステイナビリティの思想―哲学としてのエコロジー』　開催予定

ニューズレター第 11 号　　平成 23 年 2 月発行

編集　東洋大学「エコ･フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）

住所：東京都文京区白山 5 丁目 28−20　6 号館 4F　60458 室　　Tel & Fax：03−3945−7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp　　Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/